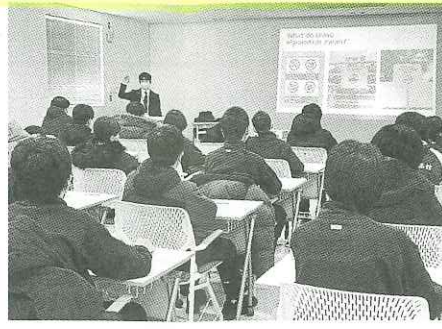


道教育大生が附属函館中で授業

多文化理解の共生学ふ

シンガポール研修経験紹介



【函館発】道教育大学函

館校の学生による英語の授業が16日、道教育大学附属

道館中学校(中村吉秀校長)で行われた「写真」。学生がゼミの一環として訪問したシンガポールでの研修経験を多文化理解の共生や異文化理解の視点で指導した。

同大国際地域学科地域教

育専攻で教鞭を執る石森広美准教授の研究室では、ことし9月に研修の一環でシンガポールを訪問。学生5人は現地で多文化共生社会への認識を深めたほか、小・中学校を訪問。帰国後は外国語の授業に研修での学びを取り入れ、多文化共生や異文化理解を指導する外国の授業を構想した。

これまで教育実習を行った道教育大学附属函館小学校や函館市立北日吉小学校、日吉が丘小学校で授業を指導している。附属函館中には同大の3年生5人が来校。中学1年生101人を対象に各学級

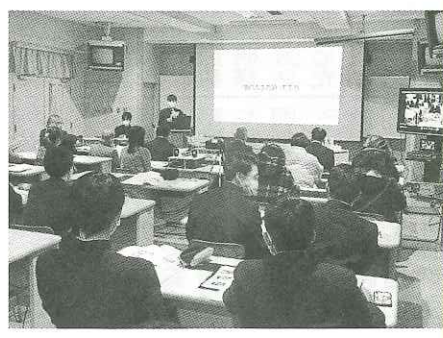
文化理解」の単元を指導した。本時の目標は「Harmony(調和)をキーワードとして多文化共生社会について理解を深める」と設定。学生らは、シンガポールの生活や言語、宗教などについて英語を交えたり写真を示したりしながら説明した。学生の一人、工藤未来さんは異文化理解の意義について説明。英語で世界地図を示しながら生徒にシンガポールの位置を確認させたほか、クイズを交えて英単語の意味を理解させる学習を展開。「シンガポールはFineの国と言われている」とし、Fineの意味について①笑顔②暑さ③罰金④危険な国⑤の4点を提示。「洗練された」や「罰金を課す」といった両方の観点からFine cityと呼ばれることを紹介した。

理由について、菅原涼成

さんは、禁煙等の規制が厳しいシンガポールの状況を伝え、多民族国家であることや美しい景観の保全が主な目的であることを解説した。

地域活性化施設を提案

旭工高 卒業設計発表会



【旭川発】旭川工業高校

(稲津誠校長)は16日、同校で卒業設計発表会を開いた。建築科3年生36人が地域活性化を図る施設を設計・提案。CADなどで製作した図面を示しながら工夫点を説明するとともに、後輩にアドバイスを送った写真。

学生らは宗教や人種の異なる様々な人が共生する現在の学校の様子を写真と共で紹介。他者との違いを受け入れ、相手を尊重する調和と異文化理解の重要性を強調した。

学習後、附属函館中の土橋晋々さんは「シンガポールの文化について学習し、日本ではあまり異文化理解が進んでいないように感じた。

身のアイデアをもとに制作した設計をプレゼンテーションした。うち芝山巧章さんは「前世代が楽しめるような施設は少ない」という思いから買物公園に年齢性別問わず利用できる複合施設をテーマに選択。雑貨店や書店、アートミュージアムなどが入る施設の設計を提案した。

保護者や内定先の管内企業などが来校。3年生は自

た。多数の宗教がある中、調和している環境が印象的だった。学んだことを今後の学習や日常生活に生かしていきたい」と振り返った。

ケッチアップなどで形になっていく過程が楽しかった。時間の使い方、計画性を持って作業することを学んだ」と感想を。

後輩へは「今のうちからどのようなものを作りたいか考えておくと3年生になったときに楽。案が出ない場合は家族や友達に聞いたり、国内や海外の建物を調べたりすると良い」とアドバイスをした。

芝山さんは「これから何かを作るのは苦手だが、ス

た。生徒はミュージシャンの迫力あるコンサートを体感しながら、手拍子で参加するなど楽しんだ。

コンサート後は生徒たちが各学科で製作したバナー

演奏心に響き

鑑賞会

